青梅市教育委員会いじめ問題対策委員会会議録

日時：令和3年8月26日（木）午後1時15分

場所：青梅市役所2階災害対策本部室

1 あいさつ

2 諮問

青梅市いじめの防止に関する条例の一部改正について、青梅市いじめの防止に関する条例第12条第2項の規定にもとづき、青梅市教育委員会いじめ問題対策委員会へ諮問する。

3 委員長あいさつ

4 議事

(1) 青梅市いじめの防止に関する条例の一部改正について

【説明】改正の理由について、過去2年間における重大事態の発生を踏まえ、重大事態への適正な対処および同種の事態の再発防止の取組をより一層強化するため、児童等またはその保護者から申し立てがあった場合の取扱いを定めようとするものである。改正の内容については、児童等またはその保護者からいじめにより重大事態に相当する事態が生じた旨の申し立てがあった場合に、重大事態と同様に取り扱う規定を置くことと、重大事態に対して学校がとるべき対処として、組織的な調査体制の確立、必要な内部調査および重大事態にかかる児童等の保護者等に対する説明について規定する。学校および学校の教職員は、当該学校に在籍する児童等または児童等の保護者から「いじめによる重大な被害が生じた」と申し立てがあったときは、「いじめの結果ではない」あるいは「重大事態とはいえない」と考えたとしても、重大事態が発生したものとして、①教育委員会への申し立ての内容についての報告、②校長を中心とした組織的な調査体制を確立するとともに、申し立ての内容の確認を行う、③申立保護者および関係する保護者（加害者側）に対して、学校の対応について説明する。また、いじめの重大事態の調査に関するガイドラインより補足説明として、重大事態の定義と対応について、重大事態は、事実関係が確定した段階で重大事態としての対応を開始するのではなく、「疑い」が生じた段階で調査を開始しなければならないことを認識する。重大事態については、いじめが早期に解決しなかったことにより、被害が深刻化した結果であるケースが多い。被害児童生徒や保護者から、「いじめにより重大な被害が生じた」という申し立てがあったとき（人間関係が原因で心身の異常や変化を訴える申し立て

等の「いじめ」という言葉を使わない場合を含む。)は、その時点で学校が、「いじめの結果ではない」あるいは「重大事態とはいえない」と考えたとしても、重大事態が発生したものとして報告・調査等に当たること。児童生徒や保護者からの申立ては、学校が知り得ない極めて重要な情報である可能性があることから、調査をしないまま、いじめの重大事態ではないと断言できない。3件発生した重大事態について現在調査中であり、教育委員会と学校は先ほどの内容を踏まえた対応が必要であったこと、また、再発防止のためにはその内容を条例に加え、いじめ防止策について、学校と教育委員会が一層連携を図り、対応する必要があると考えている。

【委員】ガイドラインは、いじめ防止対策推進法という平成25年に作られた時点から、数年経っており、大津の事件に端を発し、いじめの重大事態が発生している。そういった意味で、国が改めて子どもの立場やあるいは保護者の申立てに応じたガイドラインや対応策を考えていこうという趣旨で作ったと理解している。そのことについて説明があったが、これらを踏まえながら、条例改正の考え方について、ご意見等をいただきたい。

【委員】①について、ここだけ読むと、学校への申立てというよりも教育委員会への申立と見える。文言の前後を考えて、例えば「保護者の申立て内容について教育委員会への報告」のような表現はどうか。

【委員】要するに、学校側に対してお子さんや親御さんから苦情や申立てがあるときに、それは学校側の独自の判断で、「いやそれは、大したことないよ」「まあ、それは様子をみましょう」といい、事態を軽く見てしまって、その結果、問題が深まってしまうようなことが、これまでになかったわけではない。ここをはっきり書いて、そういうことが起こったときには重大事態だという認識で対応しましょうと、しなければいけませんよと、いうことのために、これまでの条例に不足があったとすれば、そこは改めていかなければならない。今までもなかったのかと逆に思った。いろいろと改定すべきであれば、その必要性、あるいはその具体的な事例、何があったのかということ踏まえないと、ただ改定するというのでは、意味がない。これまでの経過を踏まえてどうだったのかという点について説明がもう少しほしい。

【説明】学校側に対し、いじめの定義や重大事態への対応について、周知をしたり、研修等で扱うようにしたりして指導してきた。学校はいじめ対策委員会を定期的に行い、いじめのアンケート、いじめ防止のための授業や研修など、様々な取組を行っている。しかし、重大事態の発生があり、今もなお調査中であり、苦しんでいるお子さん、保護者がいるという状況である。

改めてそのことを踏まえ、条例に盛り込むということである。

【委員】今までに、令和元年に1件、令和2年に2件重大事態があり、事務局から報告、ここでも審議検討した。基本的なこととして、学校は被害者側の立場に立って、被害者側の心理的な苦痛を理解しながら対応するという、教育者としてはある意味当然のことである。子どもが困っていたら、それに寄り添い子どもの成長を願うというのが教育者の立場である。今までのケースは、事務局からの報告、学校の対応を見てみると、「そのところが欠けていたのではないか」あるいは「こうしていればよかった」、「先生方、配慮すればよかったじゃないか」ということが否めないという点があった。その点では、今回の指摘のように、青梅市が今まであった条例に加えて、学校の子どもたちの側に立った、そして保護者の申立てに立った、条例の改正をするというのは、言ってみればごく自然なことであり、当然のことだろうと思う。是非この方向でお願いをしたい。なお、いじめ防止対策推進法というのは、このいじめの第1条に、法律の目的が定められていて、第2条に定義が書かれている。そして定義、いじめというのは子どもの心理的苦痛を感じているものはすべていじめとして認識するということ。これは学問的にもよく言われているように、いじめの当事者同士のいじめの問題なのかと、そういうことではなくて、周りにいたもの、そして傍観者、それもいじめの対象である。学校の先生たちも友達も生徒たちも、いじめが起こっているのを見たら、先生が「君たち止めなさいよ」、そういう指導がなかったら、ダメである。先生もいじめに加担しているということになる。昭和61年の中野の事件では、大きな問題になったのが先生の認識不足。子どもたちがいじめにあっているにも関わらず、先生もいじめの葬式ごっこに加担してしまうというのは、ありえない問題であった。そこから端を発して平成6年に、愛知県の子どもがいじめにあって自殺をした。その時も、先生たち、あるいは友達同士のいじめに関する認識の不足。それは教育で道徳の授業とか、学級活動とか普段の授業でやろうとするけど、子どもたちのなかなか心が動いていかないという事態があった。その時に、国の方もいじめ対策委員会を設け、被害者の立場に親身に立ちなさいという5項目を挙げた。それが平成25年の法律の改定につながっている。そして平成25年のいじめ防止対策推進法というのは、平成23年の大津のいじめ事件。大きな問題になったのは、いじめの隠蔽体質。学校も、教育委員会も隠してしまうという動きがある。「やはり被害者の立場に立たないと」ということで議員立法がされたということの経緯だと思う。そういう経緯を、平成25年に定められた法律がこの心理的苦痛を

問題にしつつ、いじめの被害者側に全面的に立つというこの理念がしっかり生きていない。その理念が書いてあるのが3条。これ一つの協議ですので申し上げますと、3条の中に、2行目に児童等が安心して学習に取り組めない状況はよくないと。これは学校教育の基本。青梅の子どもたちが2学期始まって、「ああ今日学校が始まるな、一生懸命勉強しよう」、という気持ちになることがこの文章。法に基づいた位置づけに、子どもたちがなあってほしいということである。そして2番目にあるのが、すべての子どもがいじめを行わないということ。心理的苦痛が影響を及ぼす問題について、その理解を深めなさいということが書かれている。そして3つ目には、その対策のために、国、都道府県、公共団体市町村も、いじめを克服するように目指さなくてはならないと書いてある。私たちが、青梅の対策委員会で克服に努力しなければ、それは職務の怠慢だと思う。基本理念3条は、教育の基本になっている。これはいじめ問題だけではなくて、学校教育全体、もっと広く言うと、基本的人権の尊重に関わる位置づけになる。次の4条に、「児童等はいじめをおこなってはならない」と、一番短い文章でそう書いてある。子どもたちは発達段階において、特に、自我が芽生えてくると人との関わりの問題がでてくる。「お前、何それ着てるんだよ」「それおかしいよ」、などと冷やかしたりする。それは子どもの世界であり、当然現実的にありうる。それを先生が見逃していて、「子どもだからいいだろう」「あの子ぐらいそういうのを言っていていいだろう」「大したことないだろう」という概念はなりたたない。「相手のAちゃんが苦しんでるよ。きみが言ったこと考えてみて」、と指導しなければだめ。そうでなければ有効な対応にならない。根絶にもならない。そういう部分を、青梅の先生方に、あるいは保護者、我々も、共有していく必要がある。そういう部分が今回のいじめの条例改正の大きな考え方の一つではないかと思っている。私が普段大学で学生と一緒に勉強している中身を含めて、いじめについて教育学の視点から考え方を述べた。この次の7条、8条には、設置者の責務、学校の教職員の責務、保護者の責務、これが生きてくる。子どものいじめ問題というのは、単にそこで起こっている「いじめをしてはいけない、悪い」、そういう問題ではなく人間の尊厳に関わる問題という理解。このとき、条例の趣旨、今回の改正の意図というものを踏まえながら、この文言を精査、検討し、子どもたちの健やかな成長になるような、条文にすることが重要だ。我々で、そこまで直に検討はできないが、市で条例を決議するときに、そこも含めて、議会の先生方にも考えていただきたいと思う。このいじめの対策委員会に数年関わっている者として、この条例改

正案が出たことについて、所感を述べさせていただいた。今回は非常にいい機会と思い、前向きに受け止めたいし、それが大事なことと思っている。付け加えて言うと、法律の専門家は違うかも知れないが、法律は一旦できた段階で終わりではないと思う。その時代の変化、子どもの状況によって、変わっていく必要がある。教育論の立場から、子どもの状況、生活状況に合わせた法律設計であって欲しい。法律設計が先にある、「これを守れ」というのが法律ではないと思う。私たちは、法令の遵守というのは当然のことであるが、教育においては、子どもの学びを優先しながら、子どもはどういうものなのか、子どもの実態把握、臨床をしっかりと見つめながら、子どもの心に寄り添った、成長に寄り添った一つの法律改正の考え方があってしかるべきと思う。今までもこの会議の中でもそういう議論をたくさんやってきた。この改正案がしっかりと根付いて、学校や保護者や子どもたちに行き届いてほしいという願いをもっている。

【委員】私は、この青梅市いじめの防止に関する条例の一部改正というものを、非常に大切なものだと考えている。私自身も過去2年関わってきたが、再発防止のために一層強化するというので、徹底させなくてはと思った。②の「校長が中心」とはどういうことなのか、組織的な調査体制の確立といったことが今後課せられた課題になっていくように思う。また保護者および関係する加害者に対して、学校の説明は非常に大切なことだと思う。この文言だけでは、方向が定まっていないと思う。具体的にはどうやるかという組織論、両方の保護者と連携して方向性を示すというのが大事だと思う。

【委員】申し立て内容を確認して説明をする、この説明するというのはとても大事な気がする。認識として薄かったり、欠けていたりしたら、確認したことの意味がなくなってくるので、これは①②③と連動していることで、これ全部、必要十分条件でなくてはいけない。このことを具体的にどうするかというと、議会の先生方の審議を頂いて法律を可決した後には、本会、あるいは教育委員会でも具体的な指針や考え方を明確にして、学校に示していくことが大切なことだと思う。そういった意味でも今後の対策委員会の方向性、教育委員会、学校への指導、助言の方向性もこの条項が示していると理解している。文言が整理されて、議会でも審議されることを願っている。

【委員】②について、最後のところで申し立ての内容の確認を行うとあるが、その内容の確認を行うというのは、誰なのかというとそれは、確立された調査体制。申し立ての内容の確認を行うのは誰なのか。問題はその前の部分だ

と思う。当該調査体制が申立ての内容の確認を行う。改めて、そういわないと法律の文章というのは、勝手な解釈もできるから、だれがこの内容の確認を行うのか、今のような文章にしておいたほうがいい。

【委員】青梅市内の各小中学校には、どの学校にも校内のいじめ対策委員会があり、直接的にはそのことと思うが、事務局で精査し、誰が主語になるかということを確認に。

【委員】改正の理由の二行目のところに、一層強化するというのがある。これもまた先ほどの文言に加わる部分だが、四角の米印のところの「学校及び学校の教職員は」とこれが主語である。①のところだけ、報告という名詞で終わっている。あとの②番、③番については、主語・述語の関係で、行う、するとなっている。①も当然、事務的なことで、「報告しなければならない」、「報告する」という文末にしてはどうか。

【委員】改正に賛成。最初にお子さん、保護者が学校に「いじめられました」と相談をしたときに、「いや、いじめじゃなんです。いじめはないと思います。」という応答をされたことによって、わかってもらえなかったということが、最初のすれ違いになっていることが多いと感じている。それが、「じゃあ、いじめがあるのかもしれないね」という対応をしていれば、ここまで大きな事態にならなかったのではないか、ということがある。この改正によって、最初からきちんと気持ちを受け止めて対応するということが、学校と保護者や子どもとの信頼関係が崩れるのを防ぐことができると思う。大事な改正であると思う。

【委員】子どもたちの状況をしっかり受け止める、それが信頼につながっていくということ。子どもの様子を見てわかってあげるというのは、大事なこと。そこが学校の先生たち、生徒たちも欠けていると、疑いとか苦しい状況を見逃してしまう。初期対応のまずさにつながっていくと思う。そういう意味での改正ということ。今後、答申については、事務局と相談しながら、作成したいと思う。また、今日は委員が3人欠席であり、今日の状況報告をし、意見をいただき、判断をしたいと思う。

(2) 重大事態に係る調査について【非公開】